■整形靴の現在とこれから①■

1980年代の健康靴ブームが、整形靴を招来する

靴ジャーナリスト　**大　谷　知　子**

靴とは、何なのか。

砂地や芝生といった特別な環境でない限り、靴、あるいはサンダルなどの履物を履かずに動き回るのは困難。靴を履かずに暮らすことは不可能だ。その意味で、靴は必需品だ。

他にも、靴の役割がある。

靴は、古い時代においては、権威や階級を表すものであった。広く言うなら、自己表現。現代流に平たく言うなら、靴は、ファッションだ。

そしてもう一つが、治療具としての靴。今回から取り上げようとしている整形靴は、ここに属し、このカテゴリーを象徴する存在だ。

●外反母趾が世間を騒がせ健康靴が浮上

日本において整形靴にスポットが当たる前段には、足の健康、そして健康を損なわない靴への注目がある。

1980年頃、当時、筆者は靴業界誌の記者をしていたが、取材に訪れた著名百貨店婦人靴の名物販売員に「そんな靴を履いていると、いずれこんな足になってしまうぞ」と足型を見せられた。足の輪郭をトレースしたものだったが、親指（第一趾）が「く」の字に曲がり付け根の骨が内側に飛び出していた。その時はこの状態をなんと言うのか知らなかったが、かなり進んだ外反母趾だったことが、後で分かった。

それから数年後の1983年、整形外科医の



石塚忠雄著
『靴をまちがえると病気になる』



日本靴総合研究会による
『痛い靴はもうはかない』

石塚忠雄氏が『靴をまちがえると病気になる』（主婦の友社）という書籍を出版した。また翌年には日本靴総合研究会（当時）によって『痛い靴はもうはかない』（講談社）が出版された。これらが引き金になったかのように靴による足のトラブルに悩む女性が新聞などで取り上げられるようになった。

足のトラブルが注目を集める背景も整っていた。

1980年代初頭の流行語にキャリアウーマンがあるが、働く女性、女性の社会進出を象徴する言葉だった。そしてキャリアウーマンの日常靴は、ヒール・パンプス。パンプスで歩き回ることによって、足を傷める女性が増えていたのだ。

そして抱えているトラブルの代表が外反母趾であり、流行語のようになった。

こうした状況に対する靴業界の対応は、迅速だった。

例えば、つま先の親指側を直線的なフォルムにした外反母趾になりにくいパンプスの開発・販売。

コンピューターによる足型計測器で測ったデータに基づいてパンプスが選べるシステムの開発etc。

靴を販売するだけではなく、足に合った靴を選び出し、さらにその靴を足に合わせて調整できる技術を持った販売のプロ、つまりシューフィッターの養成・認定も始まった。

シューフィッター養成は、当時の日本靴総合研究会、現在の（一社）足と靴と健康協議会（FHA）が満を持して立ち上げた事業だが、養成講座のスタートは、1984年のことだ。

このようにしてコンフォートシューズや健康靴という言葉が生まれ、足の健康を考えた靴やサービスを提供する環境が整えられていった。

●革靴輸入自由化がもたらした影響

こうした流れの中から整形靴が登場するが、そこには、もう一つのインパクトがあった。

それは、革靴輸入の基本的自由化だ。

皮革及び革靴の輸入は、1986年3月まで1年間に輸入できる金額が制限された輸入割当（IQ=Import Quota）という制度のもとで行われ、輸入できる業者も極めて限定されていた。

それが1980年代に入ると日米貿易摩擦が激化。米国内でジャパンバッシングが起こるようになると、米国政府は農産物などの市場開放を日本に迫った。これに対し日本は抗しきれず、いくつかの品目の輸入条件の緩和などを行った。

この一つが、皮革・革靴の関税割当制（TQ＝Tariff Quota）移行だった。

TQ制は、低率の一次関税と高率の二次関税を設定し、一次関税で輸入できる数量を定め、それを超えた分は、二次関税を支払えば誰でも自由に輸入できるというもの。

1986年4月、皮革・革靴輸入は、TQ制に移行し、関税措置による輸入抑制が図られるものの制限はなくなり、基本的に自由化された。

これに伴いヨーロッパからは市場参入の窓口になる場の提供をという要望があったようで、当時の代表的靴見本市だった東京シューフェアにイタリア、フランス、それにドイツなどのメーカーが出展した。

ドイツは、健康サンダルの世界的ブランドである「ビルケンシュトック」を擁することに表れているように、フットベッド中敷を特徴とした機能靴を手掛ける靴メーカーが多い。それらのいくつかが、東京シューフェアに出展した。

1987年頃のことであり、成熟しつつあった健康靴市場のウォンツにマッチした。足



1990年代初頭の整形靴技術を教えるセミナーの様子　（雑誌『シューフィル』30号より）



「日本整形靴技術協会」設立総会の様子（雑誌『シューフィル』30号より）

に良い靴やフィッティングに力を入れる靴専門店は、国内製品だけでは満たし切れていなかった品ぞろえをドイツ製品で埋めていった。

こうして健康靴市場の製品ラインアップは充実していったが、解決できない問題もあった。既製靴では対応できないほどに傷んだ足だ。

有史以来靴を履いてきたヨーロッパには、それに対応する術が社会的に用意されているが、ドイツには長い歴史を有するマイスター制度がフォローする整形靴マイスターがいる。マイスターは、市中に店舗を構え、医師の処方箋に基づき、トラブルを解消・緩和する靴や中敷、また矯正具をオーダーメイドで製作する。

ドイツの健康靴を輸入していた業者は、製品だけでなく整形靴マイスターの技術の輸入も始めた。つまり、整形靴マイスターを招き、トラブルを抱えた足に対応する中敷を製作するなどの技術を教えるセミナーを開催するようになった。これが、1990年代初めのことだ。

それまでトラブルを抱えた足への対応策がなかった訳ではない。日本では、国家資格である義肢装具士の職掌であり、主に整形外科医の指示に従い、義肢装具士が治療目的の靴などを製作し、その靴は、靴型装具と呼ばれている。また、マイスターが紹介された当初は、その技術を用いて製作される靴は、整形外科靴と呼ばれていた。

それから10年ほどが経過した2001年、IVO JAPANとして日本整形靴技術協会が設立された。IVOは「International Verband der Orthopädie-Schuhtechniker＝国際整形靴技術者連盟」であり、日本整形靴技術協会は、国際組織の一員として設立され、2003年にはIVO世界会議が日本で開催された。また、同協会設立時に呼称が「整形靴」に統一された。

整形靴は、このような経緯を経て、日本に根を下ろした。

●リンカーンの足を救った処方靴

有史以来、靴を履いてきたヨーロッパを中心とした欧米では、整形靴も長い歴史を持っているが、医学の範疇で用いられた靴の歴史を紐解き、整形靴の歴史を読み解く一助としたい。

古代ギリシャのヒポクラテスは、医学の父として知られているが、彼の著作の中に既に足に関する記述がある。角質化した肌は削るなどの物理的処置の必要性があることを説き、足のタコやマメ、魚の目にも言及、削るための器具まで示しているのだそうだ。

歴史を一気に近世まで下ると、魚の目の切除を行う職業が登場する。

コーン・カッター（corn cutter）だ。マメ・魚の目切除人といったところだろう。17世紀のヨーロッパでは、コーン・カッターが通りに屋台のような店を出したり、マーケットを巡回したりしていた。彼らは、屋台の呼び込みよろしく大声を張り上げ客を引き、施術は、太鼓を打ち鳴らすなど大音響と共に行った。麻酔などない時代だから、客は痛みに耐えかね悲鳴を上げた。大音響は、悲鳴をかき消すためで、彼らなりの商売繁盛の工夫だったようだ。特別な技術を持った職人であり、民間医療的側面もあったようだが、“corn cutter”という言葉は、当時のオックスフォード辞典にも見られるというから、それだけ一般的なものだったということだろう。

やがてこうした営みは、一つの専門職に集約される。米国や英国には現在、ポダイアトリストという足治療の専門家がいる。ポダイアトリストは、かつてはキロポディストと呼ばれたが、18世紀に至ると、そのキロポディストが登場する。

キロポディストは、デビッド・ロウというロンドンのコーン・カッターが、自らの施術のノウハウをまとめた著作につけたタイトル「Chiropologia」に因んでいるという。「手」を意味するギリシャ語の「chiro」と「足」を意味するラテン語の「pod」を繋げたものだ。

英国では1840年、ボストンに初めてキロポディストの本格的なスタジオが登場する。また米国の百科事典には、キロポディストのパイオニアの一人であったドクター・ザハリーがリンカーン大統領の足の治療をしたと記述されているという。

リンカーンの足治療については、先に紹介した『靴をまちがえると病気になる』の



現代民主主義の父「リンカーンの足と靴」

協和病院　石塚忠雄

偏見の激痛に耐えられなかったリンカーン

アメリカの第16代大統領アブラハム・リンカーン（1809～1865）は、2メートルを超す大男だった。写真を見ていただきたい。写真は、1860年頃は、南北戦争のさなか、リンカーンがポトマック方面司令官たちを激励した時のものだが、大男ぞろいのアメリカ人の中にあって、激励するリンカーンは、なお“一段地を抜いて”いる。

・カール・サンドバーグ著　坂下　昇　訳「エブラハム・リンカーン(II)」新潮社 1972年

このリンカーンにつけられたニックネームは「手長ザル」だった。大統領に対して手長ザルもないと思うのだが、それほかりではない。膝を曲げ、そろりそろりと歩くその歩き方が、まさに手長ザルだったのだ。

リンカーンは、何故、そのような歩き方をしていたのか。

実は、足が痛くて痛くてたまらなかったのだ。立っていられないほどに痛かった。次の写真を見ていただきたい。記念撮影だから、それぞれいいところを見せようとしている。何だリンカーンの話か、聞いてやっても言いぐ、とばかりに胸を反らせている紳士もいる。しかし、それに対してリンカーンをみると…。

リンカーンの膝は曲がり、長い手は、椅子に添えられている。それもただ添えられているのではなく、しっかりと椅子を掴んでいる。これでは、まるでステッキではないか。そう、ステッキだったのだ。リンカーンは、足が痛くて痛くてたまらず、それは立っていられないほどだった。

そこでリンカーンは、靴を履かなければならない公式行事の時かぎる、すべさま靴を脱ぎ捨て、痛くてたまらない足のタコやマメを片金にマッサージし、そして絹製品のスリッパを履いて執務した。このリンカーンの足の悩みは、病理学的に見ると、どのようなものだったのか。

このことについては、リンカーンの足の痛みに関するゲティスバーグ大学のボリット（Dorit）教授に研究がある。ボリット教授は、10年間の歳月を費やしてリンカーンの足の大きさ、足の缺のサイズについての研究書を書き上げ、その中で教授は、

「リンカーンの足のサイズは、普通より約1.5倍の大きさがあり、マーファンズ・シンドローム（Marfans syndrome）という病気にかかっていた」

と報告している。

このマーファンズ・シンドロームという疾患は欧米では比較的稀な疾患だが、染色体性優性遺伝性による疾患で、神経系統を冒され、著名な外観変化として、結合組織及び骨格の変形で知られている。すなわち蜘牛状物、鳩胸、長い腕、腸平足、さらに高い者な変化として「くも状指」と称せられるいわゆる手の指、足の指が非常に長くなるという症状がある。文献によれば、リンカーンの足の缺は、通常の足の缺の2倍近くあった、となっている。

このリンカーンの足の悩みを救った人物がいる。次の2人だ。

■リンカーンの足を治した足病医（Podiatrists）と処方靴士（Pedorthists）

歩行がままならないところか、痛くてたまら

本誌『かわとはきもの』102号の石塚忠雄氏執筆の記事ページ

著者であり、1987年に設立された日本靴医学会の創設発起人の一人である整形外科医・石塚忠雄氏が、本誌『かわとはきもの』102号に執筆している。要約すると、次のような内容だ。

アメリカの16代大統領、エイブラハム・リンカーンは、骨の変形を伴う病に冒されていた。リンカーンの場合、足の変形によってタコやマメに悩まされ、歩行さえ苦痛だった。そこで意を決し、ザハリー医師に依頼し、手術をすることにした。手術は見事に成功し、足の痛みは失せた。さらにザハリー医師は、カーラーという名のペドーシストを呼び、ザハリー医師の処方による靴をつくらせた。その靴は、その後の大統領としての活躍を大いに助けた。

ここに登場するペドーシストを、石塚氏は「処方靴士」と訳しているが、医師の指示（処方）に従って治療目的の靴を製作するという点で、ドイツで言うところの整形靴マイスターと同じ職掌だ。

●戦争と外科学の発達と相関する整形靴

さて、再びヒポクラテスに登場してもらうが、ヒポクラテスの著述は、関節や骨折

について、さらには内反足の矯正法にまで及び、矯正に効果のあるものとして、丈夫につくられた靴を挙げている。

このことが記されているのは『靴型装具のすべて』（W・マルクワルト著／加倉井周一訳、パシフィックサプライ刊）だが、古代ギリシャにおいて既にマメや魚の目の治療、そして整形外科治療と靴との関係が始まっていたということだ。

では、整形外科はどのように発達したのだろうか。整形外科は、外科から枝分かれしたが、外科医は、中世においては「バーバー・サージャン（Barber Suegeon）」と言った。直訳すると「床屋外科医」となるが、中世の床屋は、歯医者、つまり歯を抜くこと、それに傷の手当て、さらに血を体外に排出することによって治療する放血術を行っていた。前段で紹介したコーン・カッターと同じような存在だったのだ。おそらく床屋は刃物を使うことに長けていたから兼業になったとも考えられる。付け加えると床屋の印である3色のポールは、赤は動脈の血、青は静脈の血、白は包帯を表している。

それが医学に昇華され専門化が図られ、外科学として成立するようになるのは、18世紀に入ってからだ。発達を促したのは、殺菌の必要性の認識とそのノウハウの開発、及び麻酔術の発達による手術のスキルアップだった。外科の一派である整形外科術の発達も、それに呼応していた。

整形外科は、英語では「orthopedics（オーソペディックス）」だが、フランス語の「orthopedie」から来ている。ニコラス・アンドリーというフランス人医師が、1741年に出版した著書『整形術（L'Orthopédie）』で初めて使った。「ortho」と「pedie」というギリシャ語をつなげたもので、「ortho」は「真っ直ぐ、正しい」、「pedie」は「子供」を意味している。整形外科とは、子供の身体を真っ直ぐに正しく育てるということから発した、運動器を対象とした医術だったのだ。

最初の整形外科治療施設は、1780年にスイスに登場（『靴型装具のすべて』）した。しかし治療法は、添え木を当てたり、包帯で固定したり、あるいはマッサージをするといったものだった。それが手術の発達によって、文字通りの整形外科へと進化していった。

そしてその発達は、戦争と密接に絡んでいた。戦争においては必ず兵が負傷する。その治療に外科的処置は必須だ。バーバー・サージャンの時代から、戦場には必ず彼らがいたそうだが、手術のノウハウが発展すればするほど、戦場はその技術を必要とし、必要がまた技術を高めた。

第一次世界大戦敗戦後のドイツでは、多くの戦傷障害者への対処が課題となり、整形外科医は、足部障害者への対処のために製靴技術者に協力を要請した。当時のマイスター制度では、広く靴製造を手掛ける親方職人（シューマッハーマイスター＝Schuhmahermeister）しかいなかったが、彼らの製靴技術を損傷した足を救うために活用する中から、整形外科の知見を生かした靴、すなわち整形靴製造ノウハウが生まれ、1937年に整形靴マイスターを資格化する制度が整った。

第一次より多くの負傷兵がもたらされた第二次世界大戦を経て、さらに整形靴マイスターの必要性が認識され、技術的、制度的にも充実したものになった。

日本における整形靴の登場に至る流れと整形靴の歴史に類する部分を大まかにまとめてみた。

次回は、整形靴に関わる各国の制度を紹介したい。